

## 和歌の浦の妹背山を巡る史料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 直子, 西本, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/761">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/761</a>

# 和歌の浦の妹背山を巡る史料

## Historical Material on Imoseyama at Wakanoura

西本直子\*  
Naoko Nishimoto

西本真一†  
Shinichi Nishimoto

### 要旨

和歌の浦に位置する妹背山は、山と言いながらも全周長約 250 メートルの小さな島である。その大きさは全国で 30 番目に小さい。島には二つの井戸があり、双方の水位や水質を調べた結果、島の直下に淡水レンズが存在する可能性の高いことがわかった。その井戸のひとつは江戸時代初期に紀州初代藩主・徳川頼宣とその母・お万の方により平和を願う聖地として計画された折に作られ、その水をお万の方が愛していたことが伝わる。江戸時代末期の文書では、妹背山周辺の岩に愛称があったらしいことも判明した。妹背山に関する江戸時代以降の諸資料を纏めて提示することが、本稿の目的である。また平成 29 (2017)年 11 月に、失われたと思われていた奥座敷東の間床の設えが発見されたことについて報告する。

### 1、泥質片岩の島、妹背山の二つの井戸

万葉集の頃の紀の川の地図<sup>1</sup>には、ゆったりとした河口に「玉津島山」と呼ばれるひと続きの島と山が描かれ、その連なりの端部における河と海の出会う水域に 4 つの小島が玉のように並んでいたが<sup>2</sup>、平安時代頃から紀の川の流路が変化して陸地が広がり、玉津島山の島々の中でひとつの小島<sup>3</sup>が水域に残った。その海中に残った高さ 14.4m の泥質片岩（黒色片岩）の小山<sup>4</sup>を中心に、徳川頼宣により周囲に地盤を造成して作られた全周長 250m の半ば人工的な島が、妹背山である。図 1 のような泥質片岩のちりめんじわ褶曲の様相が見られる。現在は常緑の広葉樹が山肌を覆って

1 日下雅義「和歌の浦」『地理』昭和 51(1976)年、pp. 21-28。

2 聖武天皇も愛でた特徴的な風景を推測させる。玉津島の玉の緒をなす如き島々の連なりは「ある種の霊的存在」であったとも考えられている。村瀬憲夫・三木雅弘・金田圭弘「和歌の浦の誕生：古典文学と玉津島神社」清文堂、平成 28(2016)年、p. 11。

3 妹背山と呼ばれる以前、江戸初期にイモ嶋とも称されていた。万葉集で紀の川を挟んだ二つの山を妹山と背山（和歌山県かつらぎ町）として妻と夫になぞらえて歌が詠まれているが、菅原正明「和歌の浦妹背山」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成 28(2016)年、p. 50 によると、東照宮のある権現山はセ山にあたり、それに対して小島はイモ嶋と呼ばれたのではないかと書かれている。郭公山と呼ばれていたとも述べられている。

4 菅原は巖島、あるいは小巖、と称している。菅原「和歌の浦妹背山」、p. 49。

\* 工学部非常勤講師（建築デザイン学科） † 環境研究所客員研究員

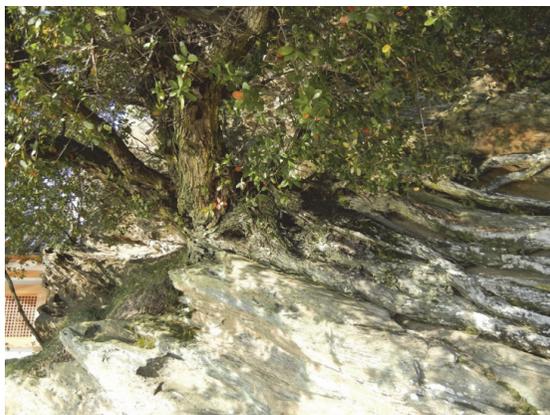


図1：伽羅岩とも呼ばれた泥質片岩の山肌

いるが、明治期の絵葉書では露出した岩山にまばらにマツが根付くばかりに見える<sup>5</sup>。

紀州初代藩主・徳川頼宣は元和 5(1619)年に和歌山に入国した翌年、和歌の浦を徳川の聖地と定め、この島に弁財天を勧請した。島は弁天島と呼ばれていたが、頼宣の母・養珠院が島を御法山とすることを望んだため、弁財天が慶安元(1648)年に他所に移されて以降は妹背山と呼ばれた<sup>6</sup>。また、頼宣は養珠院が他界して2年後の明暦元(1653)年に、母を弔うために妹背山の小山の中腹に平地を造成し、多宝塔(和歌山市指定文化財)を建てた。図2は明治後期の絵葉書でしばしば見られる写真であるが、観海閣<sup>7</sup>と海禅院多宝塔が軸線上に並んでいることがよく分かる。



図2：明治年間の妹背山と多宝塔

<sup>5</sup> 一般にマツは広葉樹に取って代われ、植生の遷移が起こる。樹木医・岡谷善博氏によれば、明治時代に北アメリカから輸入したマツ材と一緒にマツノザイセンチュウ(俗称：松くい虫)を媒介するマツノマダラカミキリと一緒に持ち込まれ、通常より早く遷移が進んだと考えられているという。

<sup>6</sup> 和歌山県教育委員会編「和歌の浦学術調査報告書」、和歌山県教育委員会、平成22(2010)年、p. 65。

<sup>7</sup> 西国二番札所である紀三井寺は桜の名所であるが、その桜を愛でるために作られたと言われる。桁行五間、梁間三間、入母屋造本瓦葺で、海に張り出す懸造となっており、四方に腰壁のみが回る開放的な木造である。江戸時代に庶民の花見の場所として賑わった。



図3：妹背井（多宝塔参道脇に位置する井戸）とあしべ屋妹背別荘の井戸

多宝塔の正面向かって右手に妹背井<sup>8</sup>という現在は使用されていない堅井戸がある。井筒の縁は砂岩の塊2つを各々半円筒状にくり抜いて組み合わせて作られ、併せ目には釣瓶を支持する木柱を納めたと思われる欠込みが作られている（図3左側）。土で覆われて確認しにくいだが、井戸周囲には外周に向かって勾配を付けた扇形の石畳が丁寧に回されている<sup>9</sup>。菅原正明は多宝塔建立前の妹背山の地形は東側と南側に大きく傾斜した岩山であり、多宝塔建立のためにその岩盤上に約3.6メートルの土盛りを行い、南と東の斜面に切石を積み上げて平地を造成したと推測している。山の南側の石積みからは石が突出して目を引く（図2、図4）。これらは一種の築庭のような感覚で、泥質片岩の奇岩と組み合わせた石積み部分が単調にならないように施された意匠のように思われる。妹背山では自然石の面白さと呼応するかのような石工技術の妙が見られる。

島には妹背井の他に、三断橋からあしべ屋妹背別荘に向かう道の右手山裾にもう一つの井戸がある（図3右）<sup>10</sup>。井戸枠の作りも風情も妹背井とは全く異なり、T型の板状の石を互いに井桁に組み合わせた四角い枠である。石板の縁はノミ痕もそのままに丸みが付けられている。井戸内部を覗いたところコンクリート製筒が認められ、近代に整備されたと推測される<sup>11</sup>。口伝では井

<sup>8</sup> 菅原「和歌の浦妹背山」、p. 56。

<sup>9</sup> 菅原正明「久遠の祈り：紀伊国神々の考古学2」清文堂、平成14(2002)年、p. 140、に南紀儒臣長田道慶（ながた どうけい）著「題目石詩並序」を読み解いているのをここに抜粋する。「妹背山の巨石を取り除いたところ、その跡が深い穴になったので、そこを百尺（筆者注：30メートル）ほど掘削すると清冽な泉が湧き出した・・・（中略）井戸枠は地下部の上部1.6メートルは砂岩の切石積で、その下2.0メートルは緑泥片岩の木口積みであり、その下は岩盤を円筒状にくり抜いている。井戸底までの深さは井戸枠の上端から8.6メートル程であり、（以下略）。」菅原の実測結果によれば井筒は地上高さ60センチ、外形126センチ、内径92センチとされる。石室調査の結果から多宝塔建立前の地形も推測されている。

<sup>10</sup> 井戸の蓋は、平成26(2014)年の和歌の浦竹燈夜であしべ屋妹背別荘の建物や庭を一般公開時に和歌山市消防団和歌浦分団長・日方広行氏により寄贈された。

<sup>11</sup> 藪清一郎からあしべ屋妹背別荘を譲り受けた西本健次郎は、トンネルや橋梁工事をを行う土木業を営み、大正年間末期には鉄筋コンクリート3階建ての自社ビルを建設するなどコンクリート工法を比較的早くから体得していた。西本直子・西本真一「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』を巡るその他の資料」武蔵野大学環境研究所紀要6、平成29(2017)年、p. 44；西本直子「旧西本組本社ビルの建造年代」日本建築学会大会学術講演梗概集F分冊、平成25(2013)年、pp. 921-922。



図4：多宝塔の敷地を造成する石積みから突出する3つの石（黄線筆者）

戸の横に茶室があったとされる。筆者も1970年代まで東屋のような建物があったと記憶する。

図4で石積みの上に多宝塔の石柵が見られる。多宝塔背後の山の斜面にも斜めの石柵が見られる。石柵は大きな石塊から柵状に彫造されたものを連結している。日光東照宮でも同じものが見られる。久能山東照宮では神廟周囲の石柵にのみこの作り方が見られる。図5にブロックの接合線を白で記入した。端部には木工にも通じる仕口が刻まれている。笠木天端に金属製の錠を打ち込んでいたと思われ、石工の工夫が散見される。



図5：多宝塔の石柵 左；組み方（白線筆者） 中；笠木天端錠の痕跡 右；地覆の仕口痕



図6：多宝塔への石階段



図7：山の斜面から採集された石灯籠の笠と台

観海閣の背後には多宝塔へ続く参道として 15 段の石階段がある。階段は自然の泥質片岩の山を直接切り出した部分に人工的な石段を加えて造られている。手の掛かる工事であったと思われる。図2の写真が撮られた時点ではすでに失われているが、当初は階段を昇りきった地点に、唐門があり、続いて拝殿、瑞門（ずいもん）が配されていた<sup>12</sup>。

観海閣階段脇の敷石を観察すると島の縁に一定間隔の四角い窪みが見られる。紀伊国名所図会には観海閣で花見を楽しむ庶民の賑わいが描かれ<sup>13</sup>、楼閣の階段脇に落下防止であろうか、小角材を組んだ柵が設けられている。敷石の四角い窪みは柵の支柱を固定するほぞ穴と推測される。敷石についてはかつてマツを生かすために土を残していた形跡も見られる（図8左）。

多宝塔の石灯籠の部分と思われる石塊が、あしべ屋妹背別荘側の山の斜面に2個見られた。落下の懸念があるため平成29(2017)年9月に和歌公園事務所に連絡して地上に移動された<sup>14</sup>。



図8：右；観海閣南階段脇の縁石に残る四角い穴 左；マツの枯れた幹と敷石

<sup>12</sup> 明治22(1889)、24(1891)年の暴風雨で観海閣と一緒に消失したと思われる。多井忠嗣「名勝和歌の浦の歴史的建造物」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、p. 118。

<sup>13</sup> 高市志友・武内華亭、西村中和画「紀伊国名所図会」巻之二海部郡、紀州：青霞堂、文化8(1811)-天保9(1838)年、21丁裏、22丁表；額田雅裕・芝田浩子（彩色）・西村中和（画）「和歌浦の風景：カラーで読む『紀伊国名所図会』」ニュース和歌山、平成24(2012)年、p. 15。

<sup>14</sup> 石階段下両脇にも石灯籠があったと言われている。菅原「久遠の祈り」、p.143。

あしべ屋妹背別荘の庭にもいくつかの石の造作が見られる。門から続く飛び石のアプローチを進み、右手前方に井戸が見える辺りに、左手に小さな自然石手水鉢がある。井戸のあたりに茶室があったとすれば蹲いであろうか<sup>15</sup>。玄関向かって左手には、江戸時代の露地空間によく見られる棗型の手水鉢がある。玄関向かって右手には、昭和 35～40 年の妹背別荘の写真に見られる濡鷲型灯籠の部分と思われる火袋（一部損傷）・笠・竿石・台が残存する。これらは豊島石製と思われる。



図 9：二つの手水鉢 左；自然石手水鉢 右；棗型の手水鉢



図 10：あしべ屋妹背別荘の石灯籠 左；現状の笠、台、火袋部分 右；昭和 30 年代の元の姿

<sup>15</sup> 茶室と呼ばれた建物は住人が母屋を離れて受験勉強をした場所と伝わるので、吹き放ちではなかったと考えられる。



図 11：あしべ屋妹背別荘の庭 左；昭和 57(1982)年以降に祀られた地蔵の社、矢印位置に洞穴がある 右；泥質片岩の山に穿たれた洞穴

さらに飛び石を奥座敷方向に進むと、右手に地蔵をお祀りした社がある。これは昭和 57(1982) 年以降にあしべ屋妹背別荘の賃借人によって造られたものである。その先には泥質片岩の山肌を穿った洞穴がある。洞穴は防空壕であったとの伝聞があるが定かではない。飛び石のアプローチの最終端には、多宝塔に続く石階段がある。岩山を削り出して造られている。階段脇には大きな加工石の石碑と自然石に寄るやや小さな石碑がある。大きい方は明治 36(1903)年のあしべ屋妹背別荘への皇太子ご訪問の記念碑である<sup>16</sup>。その手前にある緑泥片岩(青石)らしき自然石の碑は、表に「六道四生 奉書寫妙法蓮華經 全部 法界万霊」と刻まれていることから考えて、日蓮宗の多宝塔と関連する可能性が極めて高い。



図 12：あしべ屋妹背別荘の庭 多宝塔への階段と二つの石碑

<sup>16</sup> あしべ屋当主・藪清一郎が建立。西本直子・西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」武蔵野大学環境研究所紀要 2、平成 25(2013)年、p. 81。

## 2、妹背山エコロジー計画と妹背山下部の淡水レンズ

江戸時代初期、妹背山の井戸水を頼宣の母・養珠院が愛していたことはよく知られる<sup>17</sup>。この井戸水を検査した結果を報告する。

内海の島にあるあしべ屋妹背別荘の活用には小さな設備の構築が望ましいことから、平成26(2014)年に妹背山の自然に寄り添う建築を目指す妹背山エコロジー計画が開始された<sup>18</sup>。その一環として平成28(2016)年4月27日に日本工業大学生活環境デザイン学科樋口佳樹准教授により妹背山海禅院の井戸とあしべ屋妹背別荘の井戸の水の採集が行われ、水質検査がなされた結果、二つの井戸は共に淡水であることが分かり、お万の方(養珠院)のエピソードが改めて確認されることとなった。またこのことから、水の浄化に関する専門家である生地正人(株式会社四電技術コンサルタント)氏と、樋口准教授により、妹背山の下部にレンズ状に淡水層が生じる淡水レンズの現象の可能性があることが初めて指摘された<sup>19</sup>。淡水レンズは離島に降った雨が地下に浸透して、より比重の重い海水に混じることなく拡散もせず地下に蓄えられる現象で、飲み水に利用できる可能性がある<sup>20</sup>。図13の破線で示されているのが淡水レンズである。あしべ屋妹背別荘の建物と敷地の情報を、平成28(2016)年に和歌山工業高校と日本工業大学の建築系学生に設計課題として各々に提供する機会があった。図13は日本工業大学工学部生活デザイン環境学科樋口佳樹研究室(当時)の芦澤聡実さんが卒業設計において淡水レンズの利用を考案した計画説明図である。今後、淡水レンズの詳細を調べることができれば妹背山の水源の可能性が広げられるかもしれない。

古代から和歌の浦のシンボルのひとつとして絵画や歌に水の浄化能力を持つアシ(葦)が良く見られる。ただしアシは昭和中期にはほぼ消失していたのであるが、筆者らが平成24(2012)年に妹背別荘にて活動を開始したときに島の北側で一部アシが復活していた。妹背山の水環境として喜ばしい<sup>21</sup>。

---

<sup>17</sup> 養珠寺三世日演上人著「紀州海部郡和歌浦妹背山養珠寺記」に、頼宣が江戸紀州藩邸にいる母・養珠院に妹背山の水を汲んで贈ったところ、これを味見して「私はいつも妹背を見ようと思うけれどもそれもできない。今その水を味見して、和歌浦に浮かぶ妹背山の美しい景色を暫く思い浮かべるだけである」と話したという。菅原「久遠の祈り」、p. 142。

<sup>18</sup> 実行委員会のメンバーは日本工業大学生活環境デザイン学科准教授・樋口佳樹、同大学建築学科教授・西本真一、武蔵野大学環境研究所客員研究員・西本直子である。

<sup>19</sup> 平成27(2015)年から平成28(2016)年まで樋口佳樹研究室によりあしべ屋妹背別荘の台所排水を使って傾斜土層法雑排水浄化装置実証実験が行われたが、平成28(2016)年8月22日に妹背山エコロジー計画実行委員会主催で県と市の行政関係者を招き、樋口准教授、同研究室学生2名、傾斜土層法浄水法のパイオニアである生地正人氏による結果報告会が行われた席で発表された。

<sup>20</sup> 島根県大根島(おおねじま)やインドネシアに例がある。淡水は海水とのバランスで蓄えられているため、利用に際しては周囲の状態を調べて一定量を守らなければレンズが壊れてしまうので、調査の上利用を検討する必要がある。

<sup>21</sup> 昭和後期に復元を試みた時の残りと言われる。平成29(2017)年からは和歌の浦在住の日根茂氏が海中のゴミの除去を続け、より順調に生育している。

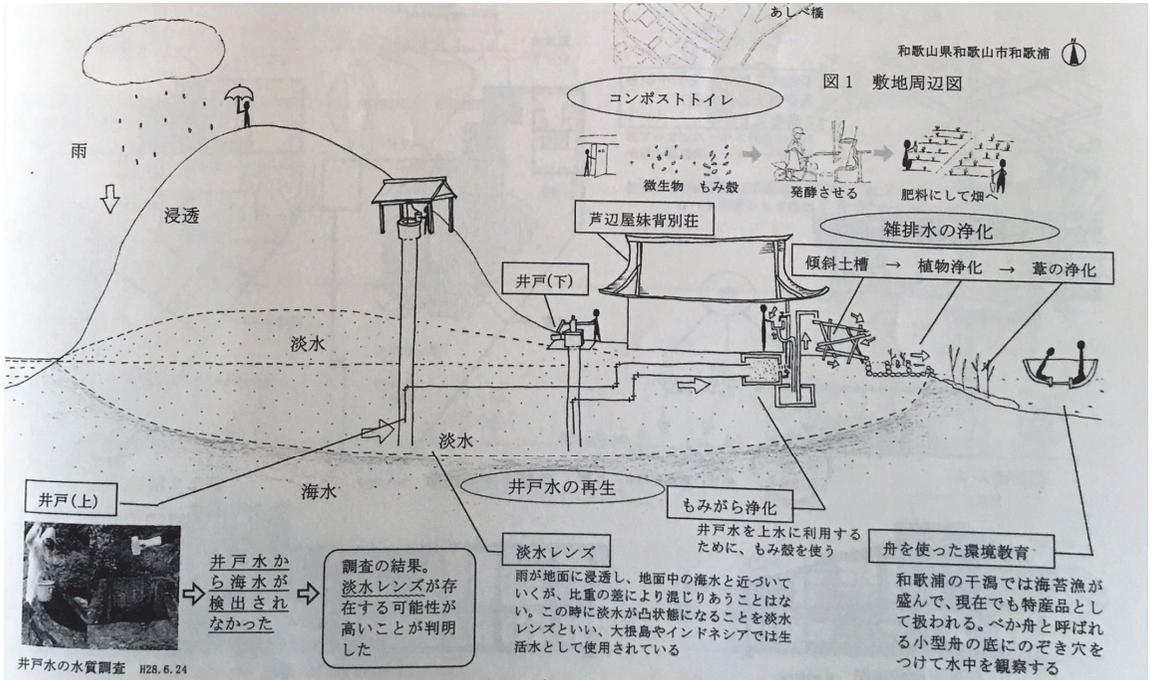


図13: 妹背山の淡水レンズ。芦澤聡実「水の世界システム」あしべ屋妹背山エコロジー計画：休憩所と文化財ギャラリーの提案より



図14: 妹背山の岸辺に根付いたアシ

### 3、「国華余芳：写真帖」にみる妹背山と三断橋・不老橋



図 15：「国華余芳：写真帖」（西本蔵）にみる三断橋と妹背山

拙稿「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」でも紹介した明治 13(1880)年刊行の「国華余芳」の写真帖には全国の名勝地に並んで、和歌の浦の二つの橋の写真が掲載されている。図 15 は妹背山と三断橋である。キヨッソーネ撮影の鶏卵写真の横に、キャプションが紙に印刷されて一枚一枚手張りされているが、よく見ると橋の名前が誤って「不老橋」と書かれている。次ページには現在の不老橋<sup>22)</sup>の写真が掲載されているが、そのキャプションには「不老橋 其の二」と書かれている（図 16）。著者の得能良介は造幣局に在職し、紙幣や硬貨の意匠を考える目的で、また暗には当時急速に海外に流出していた日本美術を記録する意図も持ちつつ全国の名勝地と美術品の画像収集の旅を敢行した。得能ら一行は国の仕事でもあり、現地にて案内人も就いて効率よく周遊したことが考えられる。現在、三段橋は存在が地元にも余り知られておらず、不老橋の名前がよく知られているのであるが、ここで名前の取り違えが起こったことには留意されるべきである。

江戸期以降、和歌の浦を題材にした絵画資料は多数残されている。和歌の浦の風景を忠実に描いた真景図に最も多く登場する題材は、内海の干潟と妹背山であり<sup>23)</sup>、その多くに三断橋が描か

<sup>22)</sup> 不老橋は紀州第 10 代将軍・徳川治宝により嘉永 4(1851)年に築造された。

<sup>23)</sup> 額田雅裕「和歌浦の風景とその移り変わり」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名

れている。静かな内海に浮かぶ島の風景と三断橋の形姿は江戸期を通じて永らく日本人の心を捉え、和歌の浦のイメージとして三断橋の姿が全国に流布していたと考えられる。本著が刊行された明治12(1879)年、江戸期の記憶から三断橋を「不老橋 其の一」、本来の不老橋を「不老橋 其の二」と捉えた可能性がある。

三断橋は頼宣が妹背山を整備した慶安4(1651)年頃までに作られた<sup>24</sup>。特徴的な三連アーチ状の意匠は中国・西湖に倣ったと言われる。しかし三断橋は相持ち構造で、それをアーチ橋に似せようとした工夫が見られる。石製アーチ橋の不老橋は三断橋より200年ほど後に治宝により完成された<sup>25</sup>。西湖に影響を受けたとされる橋は他にも延宝元(1673)年に築造された木橋の錦帯橋<sup>26</sup>がある。高い木工技術を有した日本では江戸初期において木橋が多く作られていたのであり、石の橋は想像以上に稀少であったと推測される。

頼宣は「石橋」という能の演目を愛し、特別に演出を施した紀州徳川家版「石橋」は秘曲となった<sup>27</sup>。演目の中で「石橋」は此の世と浄土を繋ぐ橋として描かれる。橋を石で作ることは、頼宣に



図16:「国華余芳:写真帖」(西本蔵)にみる不老橋

勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、p.87, 図12。

<sup>24</sup> 黒石哲夫「目翔和歌の浦の特徴と価値：古来の歌枕の世界」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、p.12。

<sup>25</sup> アーチ工法を早期に習得した熊本から石工を呼んで施工したと伝わる。熊本に現存する最古のアーチ橋は安政3(1774)年築造の日渡洞口橋(ひわたしとうぐうきょう)である。日本のめがね橋一覧表(<http://www.ishibashi-mamorukai.jp/list/sb-kuma.html>, 2017/10/23 閲覧)による。

<sup>26</sup> 岩国藩主吉川広嘉が築造。明から来た僧から情報を得たとされる。幅200メートルの錦川に架けた木造5連連続アーチ橋は世界でもユニークな木構造である。拙稿「接合部を推理する：錦帯橋」NPO 伝統木構造の会会報「伝木」28。

<sup>27</sup> 和歌山市が平成26(2014)年に野上記念法政大学能楽研究所に復曲を依頼し、紀州藩お抱え能役者だった徳田隣忠(ちかただ)が書いた伝書「御世話筋秘曲(おせわすじひきょく)」などの史料を基に、獅子

とって仏教思想と結びついた強い必然性を持っていたのではないだろうか。あるいは石という素材の永遠性を求めていたのであろうか。アーチ構造としての不老橋が見事である一方で、三断橋には技術の困難を押しでも石で橋を造ろうとした頼宣の意図が隠されているように思われるのである。

「国華余芳」の写真帖は平成 23(2011)年に石橋財団の助成を受けて再版されている<sup>28</sup>。

#### 4、「西国巡礼道中笑草」にみる妹背山

文久年間始めに尾張藩士・福富半兵衛が記した道中記「西国巡礼道中笑草」<sup>29</sup>に、福富が紀三井寺から片男波までを描いた地図があり、妹背山から不老橋まで 15 の名所の名前が書き込まれている。そのうち8つは初めて見るもので、付近の岩やマツの愛称と思われる。図 17 は筆者による写しである。手前に塩干場（塩田）が描かれ、画面中央に拝殿（観海閣）、階段、多宝塔が一直線に並ぶのは妹背山である。妹背山から画面左上の不老橋に向かって海沿いに右から伽羅岩

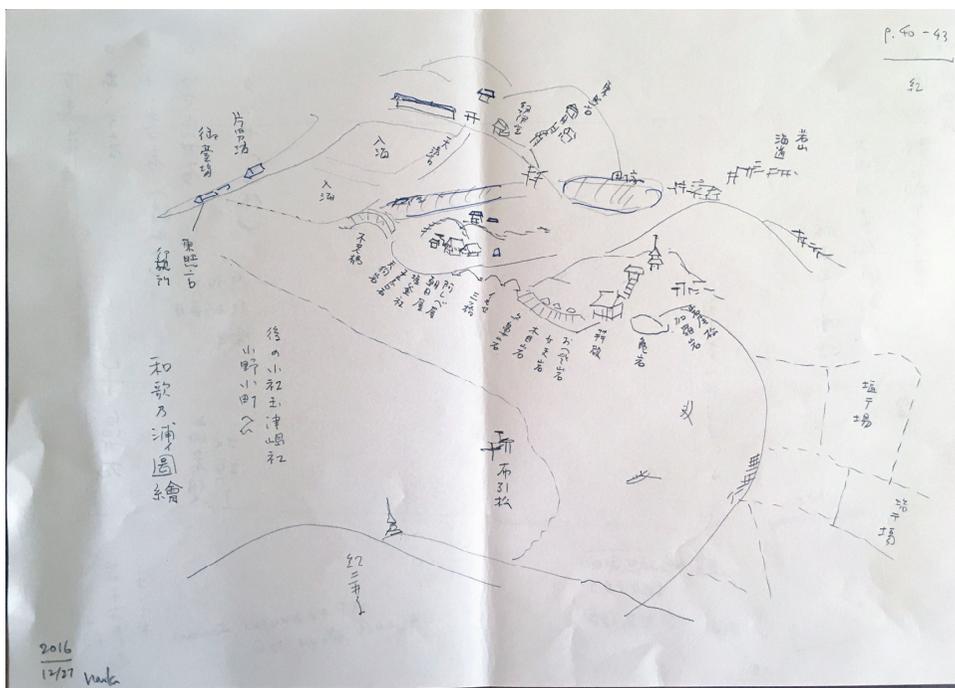


図 17: 「西国巡礼道中笑草」(和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵) 21 丁表の写し

の舞い方や鼓、笛などのリズムまで、可能な限り再現された。紀州徳川家版「石橋」にのみ使用された装束「胸掛」や舞台に据え置き作り物なども再現され、平成 28 (2016)年 2 月に喜多能楽堂で香川靖嗣・宝生欣哉らで再演されている。和歌山市のわかやま歴史館にて展示されている。わかやま新報「幻の能・紀州徳川家版『石橋』 7 日上映会」、平成 28 (2016)年 5 月 6 日。

<sup>28</sup> やや縮小された A4 サイズで一冊に合本されている。巻末には丹尾安則氏の解説が掲載されている。

<sup>29</sup> 平成 28 (2016)年 11 月 19 日に和歌山市立博物館で行われた藤本清二郎先生の講演で本著の存在を知り、同年 12 月に和歌山大学紀州文化史経済史研究所で写しを取る事が許された。同研究所の蔵書は刊本ではなく、写本・淡彩本、縦 13.5cm×横 19.1cm である。平成 29 (2017)年 11 月に同研究所で行われた特別展「紀州地域と西国巡礼」図録に全丁がカラーで掲載されている。

と岩尾松<sup>30</sup>、亀岩、拝殿、おへそ岩、女天岩、木目岩、午鼻岩、イモセ三ツ橋、阿しべ屋、朝日屋、塩釜社、ネンネコ石(岩?)、天狗岩、とある。一帯の岩や石や木に名前がつけられていたようである。安産の神様である塩釜神社の隣にネンネコ石(岩)とあるのは面白い。イモセ三ツ橋(三断橋)の手前のおへそ岩、女天岩、木目岩、午鼻岩が具体的にどの岩を指しているかはまだ判然としない。午鼻岩は穴があいて牛の鼻のような形をしていると書かれている。図17で妹背山の紀三井寺に面する石積みみの辺りに描かれた3つの丸い印は図4の突出した石に対応しているようでもある。朝日屋と阿しべ屋の並び順が誤って逆になっている点は注目される。20丁裏から22丁表のうち3丁に図の名前に関する覚書が書かれているのだが、妹背山から片男波へ向かう順に書かれている点も興味深い。江戸時代の旅日記から亀岩は紀三井寺との間を渡る船の発着場であったことが知られるが、福富はまさに亀岩の船着場から和歌の浦に入る経路をとったと思われる<sup>31</sup>。図18では石を積んで作った栈橋が亀岩に接続しているのが見える。船で到着した人々は、海に張り出した観海閣を海面から見上げて小島に上陸したであろう。山の中腹の多宝塔の建築意匠にも、下からの見上げを意識した作りが看取される<sup>32</sup>。江戸期・明治期に見られる紀三井寺と和歌の浦を結ぶ船の交通ルートにおいて、観海閣と多宝塔は人々の視線を惹きつけ、和歌の浦の玄関口である妹背山のシンボルとしてその役目を果たしていたと推測される。



図18：大正2年以降の妹背山 右手にあしべ屋妹背別荘奥座敷が見える

<sup>30</sup> 岩尾松というのは「巖」であろうか。泥質片岩はちりめんじわ褶曲の様子が伽羅に似て、伽羅岩と呼ばれた。

<sup>31</sup> 大子町史編さん委員会「西国巡礼道中記」大子町史料別冊9、昭和61(1986)年、p.49。本著は久慈郡高柴村の農民益子廣三郎ほか三名が行った旅を益子が「西国巡礼道中記」として文久9(1812)年に刊行した内容を読み解いたものである。

<sup>32</sup> 多井「名勝和歌の浦の歴史的建造物」、p.119。



図 19 : 亀岩と紀三井寺の建つ名草山

### 5、あしべ屋妹背別荘、奥座敷東の間の障壁画（壁貼り付け絵）の発見

平成 29(2017)年 11 月 4 日に日本工業大学建築学科・西本真一教授、同研究室学生 1 名、武蔵野大学建築学科非常勤講師・西本直子の 3 名により、あしべ屋妹背別荘の建築調査を行っていたところ、奥座敷西の間の欄間障子の背後に屋根裏収納が見つかり、そこに奥座敷高欄の部材や、昭和中期以降に失われたと思われていた奥座敷東の間床の間の廻り縁材、清涼棚地袋の小襖 4 枚、不明の襖 2 枚、及び床の壁に張られていた障壁画が発見された。障壁画は総長 8 メートル弱となる。裏張りにあしべ屋の古い帳簿が利用されていた。帳簿はあしべ屋の客名が記録された稀少な資料と考えられる。発見された絵画は、平成 29(2017)年 11 月 13 日に和歌山県立近代美術館・藤本真名美学芸員により、平成 28(2016)年に鑑定された西の間床の障壁画<sup>33</sup>と同じく、梅戸在貞の筆によることが確認された。平成 29(2017)年 12 月 5 日には和歌山県立近代美術館・奥村一郎学芸員、和歌山大学紀州文化史経済史研究所・吉村旭輝特任教授、和歌の浦研究者・溝端佳則氏も加わり、障壁画の表裏について正式な記録と調査が行われた。裏張りの内容全体は未だ不明であるが、政治家や銀行、また画工の名などが客名にみられ、牡蠣やキリンビールといった具体的な注文内容が見られる。裏張りについてはさらなる調査が望まれる。絵画についても裏張りの帳簿についても、専門家による今後の保存や復元を鑑みた調査検討が必要である。発見された建築部材については、すでにみつかっている筆返しなどと併せて復元に向けてしかるべき保存がなされることが望まれる。

<sup>33</sup> 梅戸在貞は大正天皇の肖像など皇室に関連する作品を残した。西本直子・西本真一「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』巡るその他の史料」、pp. 42-43。

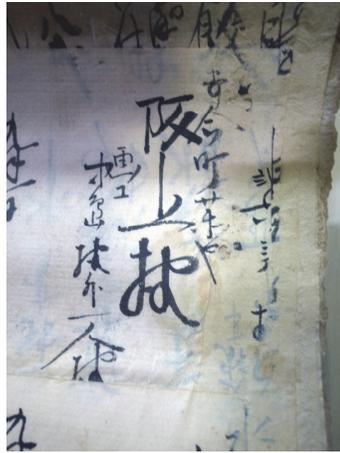


図 20：裏張りの書付部分。画工の名が見られる 奥村一郎撮影



図 21：東の間障壁画と小襖 奥村一郎撮影

## 6、まとめ

妹背山は江戸初期に自然の岩に人工の石の造作を加えて、あたかも築庭するように繊細に作られた石の島であった。和歌の浦の石や岩に愛称がつけられていたことも今回はじめて発見された。伽羅岩とよばれた泥質片岩は木目のような特徴的な柄を持つ。江戸後期は珍しい岩の姿そのものが観光の対象として注目されていたと思われ、現在とは異なる観光の着眼点がうかがわれる。

妹背山の直下に淡水レンズの存在の可能性が見つかり、飲料水の水源の可能性が増えたことは喜ばしく、継続して調査の機会を探りたい。

また日本初の写真集で、明治13(1880)年刊行の「国華余芳」写真帖に掲載されている三断橋と不老橋の名前が、誤って不老橋 其の一、及び其の二とされていたことから、当時は今よりも三断橋に存在感があったと思われる。

最後にあしべ屋妹背別荘・奥座敷東の間の紛失していた床のしつらえが発見され、東の間の床を復元できる可能性が高くなった。発見された障壁画は表裏の絵画と書付が共に重要性を持つため、今後の調査や保存方法について専門家による検討が望まれる。引き続き資料の渉猟を続けたい。

## 参考文献

芦澤聡実「あしべ屋妹背山エコロジー計画：休憩所と文化財ギャラリーの提案」、日本工業大学工学部建築学科編『NIT YEAR BOOK 2017：卒業設計優秀作品』、平成29(2017)年、pp. 2-3。

日下雅義「和歌の浦」『地理』昭和51(1976)年、pp. 21-28。

黒石哲夫「目翔和歌の浦の特徴と価値：古来の歌枕の世界」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、pp. 9-16。

塩崎毛兵衛「紀伊和歌浦図」塩崎毛兵衛、明治26(1893)年。

重松正史「大正デモクラシーの研究」清文堂、平成14(2002)年。

菅原正明「久遠の祈り：紀伊国神々の考古学2」清文堂、平成14(2002)年。

菅原正明「和歌の浦妹背山」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、pp. 49-67。

高市志友・武内華亭、西村中和画「紀伊国名所図会」卷之二海部郡、紀州：青霞堂、文化8(1811)-天保9(1838)年。

多井忠嗣「名勝和歌の浦の歴史的建造物」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、pp. 110-119。

大子町史編さん委員会「西国巡礼道中記」大子町史料別冊9、昭和61(1986)年。

得能良介「国華余芳」大蔵省造幣局、明治13(1880)年。

西本直子・西本真一「和歌浦『あしべ屋別荘』と夏目漱石」武蔵野大学環境研究所紀要2、平成25(2013)年、pp. 77-93。

西本直子「旧西本組本社ビルの建造年代」日本建築学会大会学術講演梗概集F分冊、平成25(2013)年、pp. 921-922。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要3、平成26(2014)年、pp. 99-115。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要5、平成28(2016)年、pp. 105-112。

西本直子・西本真一「和歌の浦『あしべ屋』と『妹背別荘』を巡るその他の史料」武蔵野大学環境研究所紀要6、平成29(2017)年、pp. 33-46。

西本直子「歴史的建造物保存：和歌の浦・あしべ屋妹背別荘2015年現在」伝木31、平成27(2015)年、pp. 4-5。

西本直子「近代の妹背山：あしべ屋妹背別荘について（明治大正期を中心に）」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、pp. 89-99。

額田雅裕・芝田浩子（彩色）・西村中和（画）「和歌浦の風景：カラーで読む『紀伊国名所図会』」ニュース和歌山、平成24(2012)年。

額田雅裕「和歌浦の風景とその移り変わり」名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ、名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年、pp. 79-88。

福富半兵衛（尾州丹羽郡犬山白帝城南住人）写本「西国巡礼道中笑草」文久3(1863)年。

藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版、平成5(1993)年。

村瀬憲夫・三木雅弘・金田圭弘「和歌の浦の誕生：古典文学と玉津島神社」清文堂、平成28(2016)年。

名勝和歌の浦・玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ 名勝和歌の浦』玉津島保存会、平成28(2016)年。

明治美術学会「國華余芳」写真帖（近代画説20号別冊）学藝書院、平成23(2011)年。

和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」和歌山県教育委員会、平成22(2010)年。

和歌山大学地域活性化総合センター・紀州経済史文化史研究所「2017年特別展：紀州地域と西国巡礼」、平成29(2017)年。